

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 222

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 4421. ヴェネチアへの小旅行計画:好転反応としての咳き込み現象
- 4422. メールのデトックスへ向けて
- 4423. 味噌との付き合い方と口内環境を整えるオイルプリング
- 4424. 今朝方の夢の断片
- 4425. 仮眠中の三つのビジョン
- 4426. 過去10年間継続して注目をしているザカリー・スタインという哲学者について
- 4427. 「時空間的なゆとりのある街」フローニンゲン
- 4428. 早朝に思うこと
- 4429. 投資家として
- 4430. 大切な存在者との対話
- 4431. 今朝方の不思議な夢の世界
- 4432. 昼下がりの外出より
- 4433. 早朝に鳴く小鳥の鳴き声のように
- 4434. この夏の旅について
- 4435. 便に愛しさを感じる夢
- 4436. 評価測定の危機:アセスメントとそこで信奉されている物語
- 4437. 静かな夕方に
- 4438. 日曜日の早朝に
- 4439. 今朝方の夢
- 4440. 真の教育的権威の体現者:制約と自由

---

## 4421. ヴェネチアへの小旅行計画:好転反応としての咳き込み現象

時刻は午後の7時半を迎えた。この時間帯のフローニンゲンは西日が強く、午後の3時ぐらいの霽囲気だ。

先日バルセロナとリスボンに足を運ぶことを突然思いつき、実際に両都市を訪れたのと同じように、午前中にふと、近々イタリアのヴェネチアに足を運んでみようと思った。

先日、書道家の篠田桃紅さんの展覧会について調べることに加えて、画家の小松美羽さんの展覧会についても調べていた。すると、小松さんの作品がヴェネチアで見られるということ知った。そうしたこともあり、どこかのタイミングで二泊三日か、三泊四日ぐらいの小旅行としてヴェネチアに足を運んでみようかと思う。今のところ、そうした旅のスケジュールであれば、比較的いつでも行けそうだ。モスクワ市内のスクリャービン博物館やモスクワ郊外のチャイコフスキー博物館にも、同じような感覚でぶらりと足を運べるような気がしている。

今日は午後に街の中心部のオーガニックスーパーに行き、幾つかの品を購入してきた。その中でも、今日はマカパウダーを始めて購入した。早速今日の夕食のサラダに和えるためにスプーン一杯入れてみたところ、その独特の味に驚かされた。明日以降は味噌汁に入れてみようと思うが、朝と夜の味噌汁のどちらに入れたほうがいいのかはまた実験を試してみたり、調べてみたいと思う。

今朝方の日記にも書き留めたが、ここ数日間続いていた原因不明な咳き込み現象が止んで一安心している。その原因についてはいろいろ書き留めていたが、何か一つの原因に特定することはできず、様々な原因が複合的に作用した結果として起きた現象だったのではないかと、というのが一応の結論であった。だが先ほど改めて調べ物をしていると、ここ数日間続いていた咳き込み現象は、腸内環境の改善の最後の関門の前に起きた好転反応なのではないか、と思ったのである。直感的に、それが最もしっくり来る説明であった。

バルセロナとリスボンの旅に出かける前から果物・野菜中心の食生活に変え、旅から帰ってきてからは、オメガ3脂肪酸が含まれるオイルを積極的に摂取し始めた。特にオイルを変えてからは体調がさらに良くなったのだが、そのタイミングに合わせて、あるいは少し遅れて咳き込み現象が起きたのである。

---

---

身体の状態が改善に向かう過程、特に毒素を排出し始めたサインとして好転反応が起こることのことであり、好転反応の一種として咳が出始めたのだという説明が一番納得感がある。好転反応のは色々な種類があるが、鼻水や喉の痛みとして現れることがあるということを知った。蓄積された微生物や毒素が、口、喉、鼻に多く溜まっているために、そうした症状が見られるとのことである。

また、好転反応は、数日で治るのが一般的であり、長くても一週間ほどのことである。私の場合も、それは突然に現れ、実際に数日間で治った。また一つ、未知なものが既知になったように思う。フローニンゲン:2019/5/22(水)19:44

#### 4422. メールへの脱トックスへ向けて

時刻は午前4時半を迎えた。夜明け前のフローニンゲンの街に、小鳥たちの鳴き声がこだましている。小鳥たちの鳴き声がこの世界に反響する度合いは優しく、それはまだ目覚めぬ街をそっと起こすような声にも聞こえる。

今、早朝の目覚めの一杯として、大麦若葉とチアシードを水に割ったものを飲んでいる。チアシードに関しては、昨日の朝から水に浸しているため、一つ一つの種がジェル状になっており、その食感を好んでいる自分がいる。大麦若葉と混ぜると、ジェルに大麦若葉の成分が絡まり、それを摂取すると、身体の内側に運ばれやすくなるような感覚がある。

今朝の起床は午前4時であり、今日も一日が充実したものになるという確信がある。この時間に起床し、そこから夕食を取り終える19時までのおよそ15時間ほどは、自らのライフワークに充てる時間となる。ライフワークの一環として、もちろん企業との協働プロジェクトもあるが、夕食を摂り終えるまではメールを一切開かないことによって、随分と集中して自分の活動に従事することができる。夕食を摂り終えるまではメールを開かず、返信もしないということが習慣となって本当に嬉しく思う。

メールを開かなければ不安になり、返信しなければ不安になるというのも、ある種、身体に悪影響を及ぼす食やアルコール、そして薬物などへの中毒と症状は同じであろう。メールに対して中毒症状になっていることを自覚し、それが人生の質を間違いなく低減させていることに自覚的になってから、少しずつ工夫を重ね、今は日中にメールを開いたり、返信したりすることがなくなった。今後もこの

---

習慣は維持・徹底させていきたい。また、いつかメールを完全に使用しなくなる日が来ればと思う。その実現に向けてはいろいろとやることもあり、すぐには実現されないであろうが、メールを開くこともなく、メールを返信することのない生活がやってくれば、さらに充実感に満たされた日々を送ることができるだろう。

そうした実現がすぐにやってこなかったとしても、今後できることとしては、メールを開くこと、及び返信する間隔を少しずつ伸ばしていくことである。それも今すぐには難しいが、今後数年以内に実現させていきたいことではある。

案としては、まずは二日に一回メールを開くこと・返信することから始め、それを三日に一回、四日に一回と伸ばしていき、一ヶ月に一回ぐらいにまで伸ばしていく。今の私にとっては、メールの利便性などよりも、メールの中毒性、さらには自らのライフワークに取り組むための集中力を削ぎ落とす否定的な側面を強く感じさせるツールになっている。メールというツールそのものを、この人生からデトックスする必要性を実感している。フローニンゲン:2019/5/23(木)04:54

#### No.1976: The Essential Power of Life

Taking Chrollera, I can feel the essential power of life. Groningen, 17:18, Thursday, 5/23/2019

#### 4423. 味噌との付き合い方と口内環境を整えるオイルプリンゲ

時刻が午前5時を迎えると、夜がうっすらと明け始め、街路樹の緑色や赤レンガの家々の色などがはっきりと見えてくる。

日本の伝統発酵食品である味噌を生活に取り入れてから、日々の食生活が随分と豊かになったように思う。街の中心部のオーガニックスーパーには、幾つかの有機味噌が取り揃えられており、私はその中でも三種類の味噌を使っている。八丁味噌、玄米味噌、麦味噌の三つである。その中でも最も人気があるのは玄米味噌であり、それが売り切れの 때가 頻繁にある。オランダ人が玄米というものが何かについてどこまで深く知っているかは別として、身体に良いものだという認識があるのだろう。

---

そのスーパーで売られている八丁味噌は、三つの中では最も熟成期間が長く、24ヶ月ほどだ。その他の二つは12か月である。私はこの長く熟成され、濃い味わいを持っている八丁味噌を早朝に飲むことを習慣にしている。今も、一昨日に作ったベジブロスに八丁味噌を溶かし、そこにクミンなどのスパイスをかけて飲んでいる。

味噌について改めて調べてみると、味噌が持つ様々な効能には驚かされる。味噌の歴史を含め、その効能からは学ぶことが多い。

味噌に関しては私も一つ大きな思い込みがあり、それは塩分に関するものだ。確かに味噌には塩分が含まれているが、それは多くの加工食品に入れられている人工的な塩化ナトリウムではなく、身体の生命活動の維持に不可欠なミネラルとしての塩分である。もちろん、どのような味噌を選ぶのか、つまり出来るだけオーガニックな味噌を選ぶことが重要になるが、そうした味噌であれば、一日に三杯ほど味噌汁を飲むことが推奨されていたりもする。

現在の私は、早朝の一杯の味噌汁、夕食時にサラダに和えるか、サラダを食べない日には味噌汁にして味噌を摂取している。また、昼に身体が味噌を欲していれば、具なしの味噌汁にして味噌を摂取するようにしている。味噌との付き合い方はそのような形だ。オランダにいながらにして、幾つかの有機味噌を摂取することができるのは本当に有り難く、今後も味噌には随分とお世話になるだろう。

今日も起床直後にオイルプリングを行った。一昨日にオイルプリングで用いていたココナッツオイルを全て使い切り、昨日新しいものを購入しなかったので、今朝もオリーブオイルでオイルプリングを行った。もちろん、オリーブオイルでもオイルプリングをすることは可能であり、オイルプリングの原点を辿れば、アーユルヴェーダではごま油を使ってオイルプリングを行っていたのである。とはいえ、抗菌作用の高いラウリン酸を多く含むココナッツオイルで実践する方が効果があるであろうから、今日は午後に新しいココナッツオイルを買いに出かけようと思う。

幸いにも、今日も晴れとのことであり、確かに今の時間帯は寒いですが、日中は暖かくなるため、ジョギングとウォーキングを兼ねてスーパーに立ち寄ろうと思う。

---

腸内環境が整い始めてくると、日々の幸福感が本当に増してくるから驚きである。腸内環境を整えるためには、当然ながら、腸内環境に良い良質なものを適量食べることが大切であり、腸内のデトックスが進むような適度な運動を行うことが大事だが、以前にも述べたように、腸内に食べ物や飲み物が入ってくる入り口、つまり口内環境を整えることが大事になる。よく言われているように、私たちの口の中は、腸管全体の状態を表しており、口が健康なら、腸も健康だということである。

私は大学時代に、吉祥寺の漢方薬の店に定期的に通って漢方を飲み続けていた。その時に、舌の状態を見るという舌診(ぜっしん)を毎回受けており、その日の自分の舌の状態を見て漢方を処方してもらっていた。大学に入学した時から卒業するまで、ほぼ毎月この店に通い、漢方のお世話になっていたことを思い出す。ひょっとすると、漢方を含め、食や健康に対する関心はその時からあったのかもしれないと思う。

話を口内環境に戻すと、酪農家も、動物を購入する際には、必ず彼らの口の中を調べるそうだ。上述の通り、人間も動物も、口腔内の状態が身体全体の状態を反映しているからである。おそらく酪農家は、そうしたことを経験則的に知っているのだと思われるが、近年の疫学的研究や細菌学研究などによって、各種の病気と口内環境との関係性が随分と示されている。こうしたことから、口内環境を整えることの大切さを実感するし、実際に口内環境を整えてみることによって、何よりもその意義を体感することができる。単なる知的理解ではなく、こうした体感的な理解をすることがどれほど重要なことか。

オイルプリングをする前の私は、市販のマウスウォッシュを長年活用していた。当時は何の疑いもなくそれを使っていたが、どうやら市販のマウスウォッシュは、口内細菌の善玉菌、悪玉菌関係なしに、すべてを根こそぎ殺菌してしまうことを知った。ある意味、それは無菌状態を人工的に作り出すことになり、それによって逆に口腔内が無防備な状態にさらされ、結局のところ各種の悪玉菌を繁殖させやすくなってしまふということを知ったのである。

実は、市販のマウスウォッシュを使うことのおかしさに直感的に気づいたのは、3月に一週間程度の断食を行った時のことだった。断食の最中に、どうやらマウスウォッシュを使うことが身体に悪いのではないかと直感的に気づき、それ以降使用をやめてオイルプリングをするようになった。マウスウォッシュの不使用、およびオイルプリングの使用を始めた体験は、直感的な把握と知識を獲得すること

---

による把握の双方を大切にすることの重要性を教えてくれるような出来事であった。フローニンゲン：  
2019/5/23(木)05:34

No.1977: Beyond a Limit Point in the Vast Blue Sky

After I found out a limit point in the vast blue sky, I'm seeing the world beyond it. Groningen,  
08:01, Friday, 5/24/2019

4424. 今朝方の夢の断片

時刻は5時半を過ぎ、この時間帯になると、もう辺りはすっかりと明るい。起床した直後から聞こえ始めていた小鳥たちの鳴き声も、より鮮明な音になっている。そよ風が優しくフローニンゲンの街を通り抜けていく。

今は寝室と書斎の窓を開けて換気をしている最中であり、同時に書斎ではヒーターをつけている。ヒーターを完全に使わなくなるのは6月に入ってしばらくしてからになるだろうか。

今朝方の夢についてまだ振り返っていなかったもので、それについて振り返り、その後に早朝の作曲実践を始めしていく。今朝方の夢はそれほど強く印象に残っているわけではない。

夢の中で私は、ある温泉旅館に宿泊していた。どうやら私は、小中学校時代の二、三人の友人とそこに宿泊していたようであり、ちょうど今から入浴をしようということになった。その旅館には、各部屋に小さな温泉が付いているのと、もう一つ別に大浴場が館内にあった。私はせっかくなので大浴場の方に行こうとし、一人の親友(HS)も一緒に大浴場に行くと言った。

私は彼と一緒に大浴場に向かうために部屋を後にした。廊下に出てみると、そこは少しばかり薄暗く、前方の見通しが悪かった。しかし、大浴場がある場所はなんとなく把握していたため、廊下が薄暗くてもさほど問題はなかった。しばらく歩いていると、友人の奥さんたちも同じ旅館に宿泊しているらしく、ちょうど一緒に大浴場に向かっていた友人の奥さんと廊下で遭遇した。

私たち三人は、その場で少々立ち話をしていた。今朝方の夢で覚えているのは、それぐらいの内容である。今朝はどうやら無意識の世界は落ち着いていたようだ。



---

今朝方の夢を書き留めたことをもってして、これから早朝の作曲実践に入る。孔子が述べているように、叡智を獲得する三つの方法(内省すること、模倣すること、経験すること)を大切に、作曲実践を行っていく。まさに私が作曲実践を行う際には、それら三つの全てがふくまれていることに気づかされる。これからは、それら一つ一つの方法をより意識的に行っていくことが重要になるだろう。

実際に曲を作るという経験を積み、曲を作ることに際しては、過去の偉大な作曲家の作品を参照し、そして実践の最中と実践後に内省を行っていく。内省に関しては四六時中行ってもいいだろうし、行ってしかるべきものだと思う。いずれにせよ、今日もまた作曲を核とした新たな一日を存分に生きていこうと思う。フローニンゲン:2019/5/23(木)05:55

#### 4425. 仮眠中の三つのビジョン

時刻は午後1時を迎えた。今日は晴れており、散歩日和であるから、後ほど出かけたと思う。

今朝は一体何時に起きたのだろうかと思うほど、起床したのは前のように感じられ、実際に何時に起きたのかをもう忘れてしまっている。早朝の日記を読むと、どうやら今日は午前4時に起床していたようだ。そこから12時半を迎えるまで、日記の執筆、作曲実践、読書、そして協働プロジェクトに関するオンラインミーティングを行っていた。起床して書斎の机について活動を始めたのが4時半であるから、仮眠を取る前に、すでに8時間ほどの活動に従事していたことになる。それもでもまだ午後1時を回ったところである。

早寝早起きの習慣を持ち、腸内環境を整えることによって心身の状態が良好なものになってくると、一日の活動に充てられる時間の量と質が高まることを実感し、そうした形で日々を過ごすことができていることを嬉しく思う。

確か今朝方は、あまり印象に残る夢を見ておらず、夢を思い出すのが難しかった。こうした日に限って、仮眠中のビジョンを覚えているものであり、先ほどの仮眠についてもそれは当てはまる。

ビジョンの中で私は、サンフランシスコ市内を歩いていた。その景色は大変懐かしく、8年前にその地で生活を始めてからの2年間、何度も歩いた場所の光景が重なっていた。サンフランシスコ市内

---

と言っても様々なエリアがあり、私が歩いていたのは、ちょうどジャパントウンの辺りであった。どうやら私は、今からそこにある「にじや」という日本食スーパーに行くつもりのようなようだった。

私はそのスーパーに向かって歩いており、坂道を下っていく形ではなく、坂道を上りながらそこに向かっていった。スーパーに到着してみると、入り口に何人かの中年女性がいた。どうやら一人はそのスーパーで働いているようであり、雰囲気から察するに、店長か何かであった。もう一人は質素な私服を着た女性であり、さらにもう一人は仕事のできそうな澁刺とした印象を与える女性であった。

3人が何を話しているのかはわからず、特に関心もなかったため、スーパーに入ろうとしたところ、開店数分前だったらしく、まだ店が開いていなかった。一旦私はドアに近づき、店が開いてないことに気づいたため、ドアから再び離れた。ドアに近づく行動と離れるという行動を取った時に、その3人の前を二度行き来する形になった。そして、私がドア越しから店内を覗いたためか、開店時間よりも気持ち早く店が開いたので、私は再度ドアの方に向かっていった。

すると、そのスーパーで店長として働いているらしき女性が笑顔で私に挨拶をしてきた。それに対して私も笑顔で挨拶を返すと、その隣にいた仕事のできそうな女性がこれまた笑顔で、「あなたも今月ですか？」と尋ねてきた。私は何のことかわかなかったので、それについて尋ねると、どうやら3人のうちの残りの2人は今月でスーパーを退職するらしく、その店長らしき人にそれを伝えているようだった。私はそこで、「いえ、それとは関係ないです」と苦笑いを浮かべながら答えると、『『関係ない』…かあ』と仕事のできそうな女性は意味ありげな笑顔を浮かべながら述べた。

私は本当にその件とは関係がなく、単なる一人の客であったため、それ以上は3人の話に立ち入らず、店内に入っていた。そこでビジョンが変わった。

そこから見えた二つのビジョンはとても短いものだった。一つには、私が小中学校時代を過ごした社宅付近がビジョンとして現れていた。

社宅と中学校は目と鼻の先であり、社宅と学校の間には道路があり、社宅からその道路に出るには数えられるほどの段差を超えていけばよかった。私は3階の自宅から外に出ると、10人ぐらいの小学生が一斉に段差の方に向かって走り出し、道路を超えて、中学校のグラウンドのフェンスを乗り越えて行こうとしていた。

---

---

私はその様子を微笑ましく眺めながら、どうやら彼らと私は今その瞬間に一緒になって遊んでいることに気づいた。その遊びの内容はシンプルであり、手に持っていたサッカーボールをパントキックして、彼らのうちの誰かの背中にぶつけ、背中にボールをぶつけられた人がラッキーボーイであると認定する遊びだった。どういうわけか、私の視界が数秒ほど薄白い光に包まれ、どこにどの少年がいるのかわかなかったが、彼らが段差のある階段を上り切り、幾人かは道路の上において、残りの少年たちはフェンスを登ろうとしている最中だった。

私がパントキックで蹴ったボールは、道路を横断中の少年の背中に当たり、彼がラッキーボーイになった。それはいいものの、私は手加減をしてボールを蹴ったつもりだったが、背中にボールがぶつかった衝撃でその少年は道路に倒れてしまい、私は車がやってこないかどうかをひどく心配した。そこでビジョンが変わった。最後のビジョンでは、自宅かどこかのとてもプライベートな空間で、私は父と飲み物を飲みながら会話をしていた。

そこで私が飲んでいたのは、レモネードであり、炭酸水か何かにオーガニックのレモンを絞りながら飲むというシンプルなものだった。そのレモンはレモネード用のものであり、基本的には果汁を絞ったら捨てるのが一般的だが、私は果肉まで食べてから捨てると思った。だが果肉まで食べようとすると、父にみっともないと言われてしまうかもしれないと思い、一応果肉まで食べるつもりでいるが問題ないかを父に確認すると、逆に父からは、「果汁を絞るだけではなく、もったいないから果肉まで食べのが好ましい」と言われた。そこでビジョンから覚め、仮眠からも目覚めた。フローニンゲン：

2019/5/23(木) 13:33

#### 4426. 過去10年間継続して注目をしているザカリー・スタインという哲学者について

先ほどふと、自分に多大な影響を与えてくれた学者や思想家について振り返っていた。人間発達に関する探究を始めてから早いもので10年ほどが経つが、私は幾人もの先人の仕事を参考にして自らの仕事に従事してきた。先人の名前を列挙すると数え切れないほどであるが、人間発達の領域に絞り、なおかつ日本でもある程度名前が知られている人物で言えば、ケン・ウィルバー、ロバート・キーガン、カート・フィッシャー、オットー・ラスキー、スザンヌ・クック=グロイターを挙げることができる。

---

彼らの書籍や論文はほぼ全て読み、彼らの仕事から得られたものは非常に多く、今の自分の在り方・生き方・仕事などを考えてみたときに、その恩恵は計り知れない。だが不思議なことに、私は彼ら一人一人の仕事を深く探究したのはほんの数年間ずつであり、この10年間継続して彼らの仕事を追いかけてきたわけではない。もちろん、彼らは年齢的にも高齢であり、すでに第一線から身を引いている人が大半であるから、彼らの研究がほとんどアップデートされてこなかったことも要因としてあるように思う。

上述の先人たちから得られた学びは非常に大きかったが、彼らの仕事をこの10年間継続して辿っていたわけではなかった一方で、この10年間、継続して長く・深く仕事を追ってきた人物が一人だけいる。それはザカリー・スタインという哲学者だ。

彼は自身でも哲学者であると述べているが、彼は哲学者にとどまらず、発達心理学者としての顔を持っており、何より私が以前に在籍していたマサチューセッツ州のレクティカの共同設立者の一人という実務家としての顔も持っている。

スタインは、まだ非常に若い哲学者であり、30代後半ぐらいの年齢かと思う。彼は、ハーバード大学に在学中は、カート・フィッシャーやハワード・ガードナーに師事しながら発達心理学を探究し、徐々に自らの関心領域を広げ、哲学、とりわけ教育哲学を主要な領域としていった。

10年前に彼の論文を初めて目にして以降、彼の論文は全て読み、彼がインタビューに答えているオーディオファイルなどは、アメリカ在住時代の4年間に擦り切れるぐらいに繰り返し聴いていたように思う。そうしたことを考えると、今の私の発想の枠組みというのは、実は上述の先人たちに根幹があるというよりも、スタインにあると言えるように思う。それほどまでにスタインが私に与えてくれた影響は大きい。

おそらく、私の中に、上述の先人に対して抱く以上の共感の念がスタインに対してあるのだと思う。端的には、探究の根源にある原体験が非常に似ているのだ。それについてはここで詳しく述べないが、この社会の中で辺境に追いやられたという体験、既存の教育システムの中で存在が抑圧されたという体験などが共通している。そうした共通の体験から探究が発せし、探究テーマに関しても、人間発達と教育という共通のものがお互いにある。

---

探究テーマ及び探究を形作る原体験に強く共鳴するものがあるスタインが、前作“Social Justice and Educational Measurement: John Rawls, the history of testing, and the future of education (2016)”に引き続き、先日“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”という書籍を出版した。

早速ドイツのアマゾンで書籍を取り寄せ、今朝から本書を読み始めたのだが、ここでも目を見開かされるような気づきと発見を無数に得ている。前作は、スタインがハーバード大学に提出した博士論文が元になっており、テーマは教育アセスメントと社会正義であり、正直なところ、教育哲学や人間発達に関する知識、およびアセスメントに関する関心があればなかなか読み進めることが難しい内容のように思う。

一方で本書もスタインが序文で述べているように、記述レベルを落とすことを一切しなかったと述べているが、前作よりは親しみやすい内容であるように思う。発達理論をこれまである程度学んでいること、ウィルバーのインテグラル理論とその理論が取り巻く言説やコミュニティーの動向にある程度精通していること、そして何より、現代の教育と経済の問題を関連付けて俯瞰的に捉えてきたという経験があれば、本書は非常に優れた洞察をいくつも提供してくれるだろう。

今日はこれからもうしばらく本書を読み、明日と明後日にかけて一文一文精読していき、初読後に時間を空けずに再読をしたいと思う。本書も他のスタインの論文や書籍と同様に、繰り返し読んで行きたい。彼の発想の枠組みは、ウィルバーやキーガンたちのものよりも私にとっては参考になり、自分の日々の探究の大きな支えになっている。フローニンゲン:2019/5/23(木)13:59

#### No.1978: A Relaxing Moment in the Afternoon

I'll resume reading Zachary Stein's new book “Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)” and go for a walk. Groningen, 13:00, Friday, 5/24/2019

#### 4427.「時空間的なゆとりのある街」フローニンゲン

「時空間的なゆとりのある街」そんな言葉が、昼下がりの散歩の最中に浮かび上がってきた。

---

つい先ほど、街の中心部にジョギングとウォーキングを兼ねて出かけてきた。スーパーに立ち寄って自宅に戻る帰り道に、冒頭のような言葉が自分の内側から自発的に姿を現した。

フローニンゲンでの生活もそろそろ4年目を迎えようとしているのだが、そのような言葉でこの街を形容したことは初めてのことだったのではないかと思う。もちろん、これまでもそうした言葉を使わずとも、似たような意味でこの街を描写してきたことは確かだ。しかし、「時空間的なゆとりのある街」という凝縮された言葉でフローニンゲンを表現したのは先ほどが初めてだったと思う。

今日は初夏のように暖かく、気温が20度ほどあった。そうした天気のためか、街の人々はカフェの屋外でくつろいでいたり、運河沿いで本を読んだり、自宅から皿とコップを持ってきて、そこで雑誌を読みながら飲み食いをしている若者の姿も見かけた。

「はて、今日は休日だったか？」と問うてみると、今日はまだ平日の木曜日である。平日の日中において、そのように市民が思い思いの場所で、思い思いに時間を過ごしている点に、この街に住む人たちのゆとりに見る。これはフローニンゲンのみならず、オランダの多くの街で見られる光景かもしれないが、今日私は改めてフローニンゲンという街が持つ時空間的なゆとりと、それに呼応したゆとりのある市民生活を目撃した。

この街に住んで3年が経ち、もうすぐ4年目の生活が始まろうとしているため、この街が作り出す時空間的なゆとりの中で生活してきたはずなのだが、ふとしたきっかけでそれを対象化し、再度その価値と意義を見出した、というのが先ほどの体験だったと言えるだろう。

とにかくもう、時間的空間的なゆとりを搾取する現代社会の暴力からは距離を置き、同時にその是正に向けた関与を継続させていこうと思う。

切れかかっていたカカオパウダーと、オイルプリングで使うためのエキストラヴァージンココナッツオイルを今日は街の中心部のオーガニックスーパーで購入した。それらが目的の品であり、それ以外には特に購入予定はなかったのだが、人間には絶えず認知的なバイアスがあり、必ず何かしらのものを見逃しているという点は、スーパーでの買い物においても当てはまるだろうと思って、新鮮な目を持って各種の棚を見て回っていた。

---

すると、このスーパーには置かれていないと思い込んでいたクロレラとスピルリナが置かれていることに驚かされた。ちょうど私がいつも、ヘンプ、マカ、カカオのパウダーを購入する棚の二つ上の棚にそれらが置かれていた。スピルリナについても一度試してみたいと思うが、今は随分と色々な植物性のパウダーを試している最中なので、また時期が来たらここでそれを購入しようと思う。

新鮮な目で各種の棚を眺めていると、母と息子の関係にあるらしく思える老女と中年男性の姿を見かけた。彼らは、ちょうど味噌のコーナーにしゃがみ込み、なにやら真剣に味噌を吟味していた。それらの品は当然ながら、私の店のものではないのだが、彼らオランダ人が日本の伝統食品である味噌を選んでいる姿を見ていると嬉しくなり、思わず二人に声をかけた。

私:「いい眼を持っていらっしゃるんですね」

中年男性:「えっ？ すいません、邪魔になりましたか。あなたも味噌を購入されますか？」

私:「あっ、いえ。お二人が真剣に味噌を選ばれていたののでつい声をかけたくなってしまいました。私は日本人で、味噌は日本の伝統食品なものですから」

中年男性:「そうでしたか。いや～、私はこの味噌は全部知ってますよ。これら全て試しましたからね。特にこれはお気に入り、マイルドな味で美味しいんです」

中年男性が指差したのは、八丁味噌であり、「マイルドな味」と彼は述べていたが、それはこのスーパーで置かれている中で最も濃い味の味噌である。だが、彼は全ての味噌を食べてみたという経験のためか、非常に良い味噌選択をしていると感心させられた。

私:「本当に良い眼をお持ちですね。その味噌は私もお勧めですよ」

中年男性:「やはりそうですか。自分の感覚を信じていつも食物を選んでいると、この味噌に偶然行き着いたんです」

中年男性は自分の胸に手を当てながらそのように述べた。私たち二人のやり取りを見ていた、その男性の母親らしき女性は微笑んでいた。フローニンゲン:2019/5/23(木) 16:18

---

## 4428. 早朝に思うこと

今朝は午前3時半に起床した。そこからいつものように、早朝の口内環境を整えるために、真っ先にココナッツオイルでオイルプリングを行った。オイルプリングを行っている間に、書斎の机につき、今朝方の夢を裏紙に書き出していた。夢を裏紙に書き出した後、早朝の日課であるヨガを行った。

先日に数種類ほどアーサナを加え、現在はそのセットを行うことを楽しんでいる。一つ一つのアーサナを深い呼吸とともに行っていると、起床直後という時間帯もあつてか、意識が深い層に入っているやすい。

眠りから覚めた意識を、覚醒意識の状態からさらにもう一度深い状態に戻すことによって一日の活動を緩やかに始めた。ヨガを終え、スプーン一杯のアマニ油を飲み、そこから大麦若葉を飲み始めているのが今の状態だ。

4時を迎え、辺りはまだ真っ暗だが、小鳥たちの鳴き声が聞こえ始めている。小鳥たちの中でも早起きなものがいて、彼あるいは彼女が今鳴き声を上げ始めている。今、小鳥のことを「それ」と表現しようとしたが、「彼あるいは彼女」と表現することにした。小鳥たちの鳴き声から性別を判断することは可能なのだろうか。今の私には、そうした知識がなく、それはほぼ不可能である。

ここでも知識の有無によって世界の見え方が変わってくるという示唆がある。仮に鳥の性別ごとの鳴き声の特徴に関する知識があれば、今鳴き声を上げている小鳥たちの性別がわかるかもしれないのだ。それがわかれば、また世界が異なって見えてくるのではないかと思う。そして、世界が異なって聞こえてくるのだろう。

世界が絶えず発する豊かな色や音を、その豊かさのままで理解したいと思う。そうした色や音に直接に触れてみたい。そのためには、この世界に遍満する多様な色や音に関する知識をできるだけ獲得していく必要があることを感じる。知識を獲得するだけではダメであり、その知識を通じてこの世界と触れ合っていくこと。そうした交流を通じて徐々に世界はその豊かさを開示してくれるのだろう。

早朝の3時台に起床すると、辺りは圧倒的な闇と静寂さに包まれており、独りの内面世界に浸っている感覚があり、それはそれで良いのだが、小鳥たちが現れてくれることによって、伴奏者を得た気

---



---

分である。やはりこの人生においては、自分が本当に必要とする伴奏者だけはそばにいてくれた方がいいのだろう。

今、辺りにどのような風が吹いているのかは見えない。近くの街灯の光はオレンジ色をしており、赤レンガの家々の近くの街灯は白色を発している。そうした光の背後に街路樹が見える。どうやら少しばかり風が吹いているようだが、それはとても穏やかだ。

幸いにも、今日の最高気温は19度と暖かいので、今日も午後に、近所の河川敷にジョギング兼ウォーキングをしに外出したい。気がつけば今日は金曜日であり、今週も終わりに向かっている。来週の火曜日からはまた気温が下がり、気温を見る限りだと、就寝中に湯たんぽがあった方がいいかもしれないと思うぐらいだ。来週からはもう6月に入るというのに。

しかしこうした気温であっても、いやこうした気候だからこそ、私はフローニンゲンを愛しているのかもしれない。昨日の日記で書き留めたように、この街から滲み出す「時空間的なゆとり」というものを私は心底気に入っているのだろう。フローニンゲン:2019/5/24(金)04:28

#### No.1979: Rhizome

My internal rhizome is extending its roots. Groningen, 17:04, Friday, 5/24/2019

#### 4429. 投資家として

今朝も昨日に引き続き早起きをすることができたので、一日がまた充実したものになるだろうと、この時点で実感している。

昨日の夕食前に入浴をしている時に、改めて今後の自分は一つ投資家としての側面を持つだろうと予感した。これまでの自分の人生において、私は知識も技術も何も持っていない時に、随分と多くの人たちから投資を受けてきたのだということにはたと気づかされたのである。それは金銭的な投資だけを指すわけではないことは言うまでもない。有形無形の投資——それは「支援」と述べた方が正確かもしれない——を絶えず受けてきたことによって、何もない自分が今このようにして日々を生きているのだと実感させられる。

---

社会正義について優れた考察をしている哲学者のジョン・ロールズが述べるように、最も身近の人たちの立場に立ち、今後仮に何かしらの投資を行うのであれば、それが彼らにどのような影響を与えるか、その影響が彼らにとって最善のものかどうかを判断したい。意志ある者への投資、そして意志なき者への投資の双方を実現させていく。

人生のフェーズが変化しているのを実感する。様々な観点において投資家になろうとしているのもそのためだろう。前述の通り、それは金融的な投資家という側面だけではなく、教育的な側面も多分にあるだろうし、そうした側面がなければならぬだろう。投資については今後も学習と実践を続けていく。

教育的な投資を行っていく土台、あるいは準備として金融的な投資に関する知識と技術、さらには感性というものを育てていく。それに向けて幾つか仮説的な考えがあり、行っていくべき実験が無数にあるのを知っている。

昨日は、現在手持ちの金融ポートフォリオを見直し、銀行に預金していてもしょうがない余剰資金を投資に回した。その投資先には以前から資金を入れていたのだが、今回改めて追加の出資を行った。長期的な視点を持って、その投資先が今後どのように、かつどのような社会貢献を果たしていくかを判断した結果、改めて追加投資を行った。過去に、長期的な視点を持って自分に対して有形無形の投資を行ってくれた人たちがいたように、私も同じスタンスで今回の投資先の活動を見守っていきたいと思う。

現在も確かに、労働呼んでいいのかわからないが、労働を通じて収入を得ているというのは事実である。だが今後は、種々の観点における投資家としての活動も一つのライフワークとなり、労働収入を求めることはなくなってくるだろう。

金融的・教育的な投資については、着実に知識と技術を涵養していく。大学時代に熱心に金融論を学んでいたというのも、きっとそのためなのだろう。自分の人生における役割の一つにそうした投資活動というのがあり、それをロールズが述べるような社会正義の観点から行っていくこと。さらには、人間発達の観点からそうした投資を行っていくということが自分の役割の一つのように思えてくる。

---

今、人生が新たな節目に入ってきており、これまでの学びや経験が一つの輪のように結びつき始めているのを実感する。多様な領域を知らず知らずに行き来していたこれまでの自分がやってきたこと・学んできたことが、緩やかに結びつき始めている。

投資と作曲というのは一見すると奇妙な組み合わせだが、それらの実践は今後一生涯行っていくものになるだろう。フローニンゲン:2019/5/24(金)04:47

#### No.1980: In the End of a Week

This week is also approaching the end. It seems that tomorrow will be Saturday. Groningen, 21:05, Friday, 5/24/2019

#### 4430. 大切な存在者との対話

慈しみに満ち溢れた新たな一日が始まった。時刻は午前5時を迎えようとしており、小鳥たちの優しい歌が早朝の世界に溢れている。それは一日の始まりを間違いなく祝福している。

この時間帯になってくると、辺りは徐々に明るくなってきている。夜明けの中で小鳥たちの鳴き声に耳を傾けながら、早朝の一杯の味噌汁を飲んでいる。

昨夜ベジブロスを作り、その出汁に八丁味噌を加え、種々のスパイスを振りかけた。静けさの漂う早朝の世界の中で、数々の生命の連鎖が産み出した一杯の味噌汁を飲むことにただただ感謝の念を持つ。

手持ちのオーガニックのカレースパイスには、様々なスパイスがブレンドされており、今後も各種のスパイスが含まれているカレースパイスを早朝の味噌汁に入れていこうと思う。今の私には、早朝にカレースパイスを摂取することが合っているのだと思う。

夜の味噌汁に関しては、昨日試してみたように、マカパウダーを振りかけたいと思う。アンデスの過酷な環境の中で育ったこの植物にも感謝の念を捧げ、栄養豊富なマカの恵みを夜にいただくことにしている。夕食の味噌汁にマカを入れることは今後の習慣になるだろう。

---

3時に起床した際には、まだ小鳥たちの鳴き声が聞こえてこなかったので、ピアノ曲を書斎の中に流していた。バルセロナ・リスボンの旅が始まる前あたりから昨日まで、スペインやポルトガル出身の作曲家のピアノ曲ばかりを聴いていたのだが、昨夜からグレン・グールドが演奏するバッハを聴き始めた。

このピアノ曲集を何度繰り返し聴いたかわからないが、今朝もそれを聴いていた。時刻が4時を過ぎてからは小鳥たちが鳴き声を上げ、今はもうその声が随分と鮮明に聞こえ始めたので、グールドの演奏を一旦止めて、書斎と寝室の窓を開ける形で小鳥の鳴き声を聞くことにした。ここから一、二時間ほどは、小鳥たちの鳴き声に包まれる形で過ごしていきたいと思う。

今日も昨日に引き続き、作曲実践に並行して、哲学者ザカリー・スタインの“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”の続きを読んでいく。本書に掲載されている洞察及び示唆から得られることは本当に多い。人間発達の観点、教育の観点、さらにはより巨視的かつ構造的な観点で社会を捉えていくことを手助けしてくれるような考察が本書には詰まっている。おそらく今日と、明日明後日の土日を活用すれば、本書の初読が終わり、再読に入ることも可能かと思う。

昨日の日記でも書き留めたが、ウィルバーや他の発達論者以上に私に影響を与えてくれたのは、そして今もなお影響を与え続けてくれているのはスタインであり、本書も繰り返し読んでいきたいと思う。今日の読書から得られた事柄は、本日の日記、さらには今後の日記の中で何かしらの形となって現れてくるだろう。小鳥たちやスタインと間接的かつ直接的な対話を日々行えるということ以上に嬉しいことはなく、今後も自分にとって大切な存在者との対話を継続させていきたい。フローニンゲン:2019/5/24(金)05:13

#### No.1981: At the Beginning of a New Day

A new day just began peacefully. Today also will be active for me. Groningen, 06:15, Saturday, 5/25/2019

---

#### 4431. 今朝方の不思議な夢の世界

今朝は早朝から青空が広がっている。時刻は午前5時半を迎えようとしており、もうすっかりと明るくなった。街路樹の葉の動きを注意深く眺めてみると、微風がフローニンゲンの頬を撫でているのがわかる。赤レンガの家々の近くの街路樹には、ピンク色の花が咲いている。あれは一体なんという名前の木なのだろうか。

数ヶ月前と比べて、いやバルセロナとリスボンへの旅に出かけた一ヶ月前と比べて、書斎の窓から見える景色は随分と彩り豊かになった。そうした多様な色に包まれながら、今日も充実感と幸福感を感じながら生きていくことができるだろう。

今朝方の夢の内容は、起床してすぐに裏紙に書き留めている。今改めてその裏紙を眺め、文章として形にまとめておきたいと思う。

夢の中で私は、見慣れない砂浜にいた。そこは、私が長らく親しんだ山口県光市の室積の砂浜でもなく、虹が浜の砂浜でもない。どこかそこは、一つ学年が上の私の幼なじみが東京から引っ越した先の千葉の砂浜ではないかと思う。小学校6年生ぐらいの時に、彼の家遊びに行ったことがあり、その時に海でも遊んだのを覚えている。あの時足をつけた砂浜が夢の中に現れていたように思う。

その砂浜で私は、米国の人気連続テレビドラマ『ハンニバル』の主人公を演じたマッツ・ミケルセン氏と出会った。ミケルセン氏と私は初対面であったが、そこでの関係性は、「ハンニバルとその親友」というものだった。そのため、そこで私は彼のことをハンニバルと呼んでいた。

ハンニバルは、どうやら何人かの人たちに追われているらしく、私と一緒に逃走することを持ちかけてきた。私は特に逃げる意味がなかったのだが、彼の申し出に同意をして、砂浜を一緒に小走りし始めた。すると突然ハンニバルが、「君は自分と同じ匂いがする。美しく人を殺し、そこに美を見出すことができる」と述べた。彼はどうやら私に共感の念を抱いているらしかったが、その共感の念が生まれている特性というのは、サイコパス的なものであり、果たして自分が美しく人を殺し、そこに美を見出すことなどできるのか疑問であった。

---

私が彼の発言に疑問を持つと、ハンニバルは、「ならばそれを証明してあげよう」と述べた。すると、彼を追ってきていた人物が目の前の砂の中から手を出してきて姿を見せはじめた。現れた手を見てもみると、兵隊服のようなものを着ていることがわかり、どこかの国の軍隊がハンニバルを襲おうとしているのがわかった。するとハンニバルは、砂の中に潜り、その兵隊を何らかの方法を用いて爆死させた。

そしてそこからは、今走ってきた海岸を逆戻りするような形で砂の中を泳いでいき、後ろから追ってきた兵隊たちを次々に爆死させていった。彼の姿は依然として砂の中であり、数人ほど兵隊を殺し終えた後に、再び砂浜に姿を現した。彼が次々と兵隊を殺していく姿は、ある意味芸術的であり、「美しく人を殺し、そこに美を見出す」という意味がなんとなくわかってしまう自分がそこにいた。そうした自分に気づいた時、私はハンニバルを追いかける一人の人物になっていた。

しかし私は兵隊ではなく、警官でもなく、一般市民として、あるいは彼の親友のままで彼を追いかける人物としてそこにいた。ハンニバルは不敵な笑みを浮かべ、私に追いかけられることを幾分喜んでいるかのようであり、同時に、私に彼を捕まえることができるのかを試しているようにも見えた。

ハンニバルは砂浜の上で一旦立ち止まり、私の方を振り返って、右手の4本の指を根本からクイクイと折りまげる形で、私を手招きした。それは、「捕まえられるものなら捕まえてみな」という意思表示のように見えた。それは挑発的というよりも、彼にとっては一種のゲームのようであり、私もそれは緊張感が漂いながらもゲームのように思えた。私は彼を捕まえる決心を固め、前方にいる彼のところに向かって一気に走って行った。

するとハンニバルは再び逃走を始め、海岸線に駐車してあった救急車に飛び乗った。私はなんとかその救急車に捕まるとしたのだが、もう車が発車しようとしており、ダメかと思った。するとその救急車の背後に、日本人の著名なお笑い芸人風な芸能人がいて、彼が救急車の背面にぺたりとへばりついた。救急車はそのまま出発し、私はその場に取り残されることになったが、救急車が動き出すと、私はその芸能人と体が入れ替わったかのようなようであった。

厳密には、その芸能人は引き続きハンニバルに気づかれないように救急車の背面にぺたりとへばりついたままなのだが、私はその芸能人の背後霊のような形で後ろにいた。そうした状態がしばらく

---

続き、ハンニバルが運転する救急車はかなりのスピードでどこかに向かっていった。辺りの様子から察すると、それは東京の街のように見えた。しかも、それは都心であり、これから向かっているのは高速道路のインターチェンジであることがなんとなくわかった。

首都高のインターチェンジに直前に下り坂があり、坂の一番下には信号機があった。救急車はその信号機で一旦捕まり、そこから右折をしてインターチェンジへと入っていった。すると、後ろから一台のバスがやってきて、救急車を運転するハンニバルに止まるように合図を送った。救急車の背面にへばりついていた芸能人と私は後ろを振り返ると、バスを運転する黒人の運転手が私たちに気づき、私たちの存在をハンニバルに伝えようとしていることがわかった。

バスの運転手は、私たちの身柄をハンニバルに明け渡すという意図を持っていたわけでは決してなく、あくまでも親切心から、私たちが車の背面にへばりついているのは危ないという理由でハンニバルにそれを伝えようとしているようだった。そこでハンニバルはようやく私たちの存在に気づき、彼は隠し持っていたピストルを懐からさっと出し、銃口を私たちに突きつけた。その瞬間に、私はもうダメかと思ったが、突然私たちの周りを警官隊が取り囲み、私たちに降伏するように訴えかけてきた。

警官隊の数は数十人ほどであり、私たち三人ではなんとかなるほどの人数ではないのだが、ハンニバルは最後の最後まで何かを考えているようであった。つまり、何人までの人数を相手にするのであれば、自分一人で殺せるのかということを考えているようであった。しかしさすがの彼もこの大人数を相手にするのは分が悪いと察したようであり、ピストルを地面に投げ捨て、降伏の合図をした。警官隊は、私たち三人に対して、地面に付し、手を後ろに回すように述べた。

私たち三人は身柄を拘束されたのだが、手錠をかけられた時に私はふと、「この芸能人の方と私はいったい何か悪いことをしただろうか？」とふと思った。しかし私は、この機会に刑務所の中がどのようになっているのかを知りたいと思い、何ら抵抗感を示すこともなく、自らの無実を主張することもなく、刑務所に行くことにした。

不思議なことに、警官隊の一人は、先ほどまでハンニバルが運転していた救急車の運転席に座り、私たち三人を救急車で刑務所まで搬送した。救急車に乗っている間の記憶はなく、私たちは気づ

---

いた時には刑務所の前にいた。刑務所を見ると、それは随分と綺麗かつ立派な施設であり、外観上は刑務所に見えなかった。

刑務所に到着すると、時刻は昼食の時間のものであり、私たち三人は、巨大な食堂に通された。そこでいきなり記憶が巻き戻り、先ほどハンニバルに銃口を突きつけられたのは、高速道路のインターチェンジ前の場所かつこの食堂だったのだと気づいた。

説明が難しいが、インターチェンジ前の高架橋の下にこの巨大な食堂があり、そのホールに私たちはいて、そこで三人は実は互いに銃口を突きつけあっていたことを思い出したのである。厳密には、ハンニバルは私に銃口を突きつけ、芸能人の方と私はハンニバルに銃口を突きつけていた。

その場面に警官隊が駆けつけ、私たち三人がピストルを持っていることから三人を捕まえたのだということに突然気づいたのである。その記憶が蘇ると、再び記憶が前に動き、その記憶はなかったものになってしまったかのように、私たち三人は巨大な食堂のホールにいた。そこで私たちはランチを食べさせてもらえることになり、昼食はビュッフェ形式だった。その食堂は、どこかハリーポッターの映画に出てくるような豪華な作りになっており、食堂内はとても明るかった。

いざ昼食を取りに行こうとしたところで、ふと食堂の出口から外に出て行くハンニバルの姿を見つけた。私もぶらりと外に出て、ハンニバルに話しかけてみた。

先ほどまでは、追いかけて追われるような関係にあり、さらには銃口を突きつけあっていたはずなのだが、やはりそうした出来事が記憶の波によって洗い流されてしまったかのように、私たち二人の関係は、最初に砂浜で出会った時のように友人関係のようだった。

私:「ランチ食べないの？」

ハンニバル:「ああ、今は食事を食べる気がしないんだ」

ハンニバルは神妙な面持ちでそのように述べた。そんな彼の表情を見て、私は彼をそっとしておこうと思った。精神的な休憩が彼には必要だと思ったのである。



---

「ちょっと休みなよ」とハンニバルに述べると、彼は「ありがとう」と言わんばかりの表情を浮かべ、右手をスッとあげてお礼の意思表示をした。それを見て、私は再び食堂に戻ろうとした。

すると突然、食堂の出口から二人の男性が出てきた。見ると彼らは、高校時代の同級生であった。彼らは何か文句を言いながら食堂から外に出てきた。彼らに何があったのかを尋ねてみると、「いや〜、新生が騒がしくて困ったもんだね。あれじゃ、落ち着いて食事を楽しめないよ」と同級生の一人が述べた。

何やら、食堂内には大学に入学したばかりの学生で溢れており、彼らが騒がしくしているとのことであつた。私はそれを確かめに、そして自分の食事を取りに行くために食堂の中に再び入っていた。

食堂の中に一歩足を踏み入れると、そこは先ほどのような豪華な食堂ではなく、ロックコンサートか何かが行われるようなコンサートホールになっており、部屋全体がとても暗く、ステージ上だけに照明が照らされていた。まだコンサートは始っていないようだったが、ものすごい数の学生がそこにいて、異様な熱気を放っていた。コンサート前の今、そのロックグループの曲がBGMのように流れており、その音と学生たちの興奮した話し声に耳が痛くなりそうだった。

私はコンサートホールの左側の壁際をたどっていくかのように歩き、その先にある食堂に向かって歩いて行った。壁際を歩いていると、私は一人の女子大学生に話しかけられた。というよりも、なぜだか私は上半身裸で壁際を足を引きずりながら歩いており、その女子大生は私の上半身を見て、「腕が細すぎる」と述べた。現在自分はトレーニングをしており、細すぎるということはないと思いながら、彼女を相手にすることなく、食堂に向かって引き続き歩いて行った。

コンサートホールの後ろの扉を開けると、そこには食堂が広がっていた。ただし、先ほどの食堂とは様子が違い、もう少しこじんまりとした、ホテルのレストランの食堂のようであつた。ようやく食事のある場所に行き着いたと思った私は、早速大きな皿を手に取り、これからビュッフェを楽しもうと思った。そこで周りを見渡すと、その場には小中高時代の友人、そして大学時代のゼミナールの友人が何人かいて、知った顔がそこにあることに伴う安心感のようなものがあつた。

その場はなごやかな雰囲気であり、私はその雰囲気に包まれながら、早速皿に一つ目の品を盛りようとした。正直なところ、私はそこに置かれているものを選び好みなどせず、全て皿に盛りようと思った。

---

---

現実世界では摂取することがなくなった牛肉や豚肉を使った料理がそこにあり、夢の中の私はまずそれらから皿に盛ろうとした。いや私は迷わずそれらをすでに皿に盛っており、それを見た小中高時代の友人が、「やめとけばいいのに。いつものにしなよ」と述べた。

彼は私が肉類をもう摂取していないことを知っていたのか、そのようなことを述べた。そこで私はハッとして、牛肉を使った料理、豚肉を使った料理を再び元の場所に戻し、サバか何かの魚を使った料理も元の場所に戻した。そして、野菜を豊富に使ったサラダが置かれている場所に向かっていった。

友人から「いつものにしときなよ」と言われ、「それもそうだな」とすぐに思った自分がそこにいたことは興味深い、と思いながらサラダが置かれている場所に到着した。そこには何種類かのサラダが置かれていて、どれも新鮮な野菜を豊富に使っているようであり、私を喜ばせた。

早速一つのサラダに手を伸ばした時、先ほどハンニバルと銃口を向け合った食堂の中の光景を思い出した。ハンニバルに銃口を突きつけた時には、生死をかけた緊迫感がそこにあったのだが、実は私はその時、ハンニバルだけを見ていたわけではなく、ハンニバルの背後も見ていた。厳密には、背後のテーブルに置かれた食べ物を見ており、そこにはコンビニなどで売られているような、パッケージに包まれたサンドイッチが置かれていたのである。私はそれらを見て、とても体に悪そうな食べ物だと思っていた。

「あのサンドイッチの中には人工調味料、人工保存料がふんだんに使われているに違いない」というようなことを考えながら、ハンニバルに銃口を向けていた。そのようなことを思い出してから、目の前のサラダを取ることにした。すぐに目に付いたのは三種類ほどのサラダであり、そのうちの一つのボールにはもうサラダがほとんどなく、私はそのサラダをボールごと食べようと思った。残り少なくなったそのボールに、別のサラダを入れて、近くの空いているソファに腰掛けて一人で昼食を食べようと思った。

隣に置かれていたサラダにはひじきとアボカドが入っており、それらが美味しそうに思えたため、それらをボールに入れていった。すると、小中高時代の友人の一人(SS)が私に向かって、「サラダ取りすぎやし！俺もそれ食べたかったのに」と述べた。「ひじきならまだあるよ」とそれが入っていたボー

---

ルに指を差すと、友人は「良かったあ〜」と述べて嬉しそうにひじきを取り始めた。そんな彼の姿を見届けた後に、ドレッシングをかけることにした。だが、油には人一倍気を遣っており、良質な油と劣悪な油がどのようなものであるかを知っている自分にとっては、基本的に市販で売られているドレッシングなど使いようがなかった。

そこで、その場に置かれているドレッシングを注意深く見ると、「ah」という青いマークが全てに入っていた。「ah」というマークを見て、すぐに私は、それはオランダの有名なチェーン店スーパーの「Albert Heijn」のものだとわかった。つまり、そこに置かれていたドレッシングはどれも、Albert Heijnのプライベートブランド商品であり、私は一瞬それに身構えた。普段使っているような、自分で選んだ良質なオイルをサラダにかけたいと思っていたが、Albert Heijnのドレッシングの成分表示を見て、その中でも体に害がなさそうなものを選び出し、それを少々サラダにかけることにした。そして、近くのソファにどかっと座り、これからいざサラダを食べようとしたところで夢から覚めた。フローニンゲン：2019/5/24(金)06:47

#### 4432. 昼下がりの外出より

時刻は午後の4時を迎えた。つい今しがた、ジョギングとウォーキングを兼ねた運動を終え、自宅に戻ってきた。

今週のフローニンゲンは、日中に暖かさを感じさせることが多く、外に出かけるにはとてもよい。ここから9月まではこうした日々が断続的に続いてくれるのではないかと願う。

先ほどは、近くの河川敷に出かけていた。これまでは、サイクリングロードを走ったり歩いたりすることが多かったが、つい最近のことなのか、河川の堤防の草が刈られており、そこを走ったり歩いたりすることができるようになったことは嬉しいことである。

今日のような天気の良い日には、河川に船やボートが出ているのを見かけることができる。今日も一艘ほどの小型の船を見かけ、家族四人でどこかに向かっていく姿を見た。それを見かけたのは午後の3時半あたりであり、この時間は我が国の一般的な企業人たちは働いているような時間であり、在宅勤務でもしない限り、家族と時間を一緒にすることなどほとんど不可能だと思うが、その船では家族四人が楽しげに同じ時間を共有していた。どちらの国の働き方・生き方もリアルなものに違

---

いないが、私は先ほど目撃した働き方・生き方をより本来の人間らしいものだと見なしているのだと改めて思った。

今日の青空は、本当に自己の存在を飲み込んでしまうかのようだ。それはとても肯定的な意味においてである。

昨日と同様に、今日も正午過ぎに仮眠を取っていた。今朝は3時に起床し、そこから正午まで自分の活動に従事していたのであるから、仮眠のタイミングは早いものではないだろう。本日のビジョンの内容は食に関するものであり、またしてもサンフランシスコの街が舞台になっているように思えた。サンフランシスコで2年半ほど過ごした体験が、食に関する何かしらの原体験となっているのかもしれない。

ビジョンの中で語られていた内容は何も覚えていないが、ビジョンそのものに重要性を感じており、ビジョン内のイメージにも自分にとっての重要性があったためか、仮眠から覚めてもベッドの上でしばらく静かに横たわっていた。興奮した血流が穏やかな流れになっていくのを待つかのように、ビジョンの重要性が自分の中で穏やかに流れていくのを待っているような感覚で私はしばらく仰向けになったままだった。

仮眠中のビジョンも夢と同様に、鮮明に覚えているもの、感覚として強いものなど、いろいろな種類があることはやはり興味深く、今後も何に活用するかはさておき、とりあえず覚えている範囲のことを書き留めておきたいと思う。フローニンゲン:2019/5/24(金) 15:58

#### No.1982: The Stagnant Reality

This reality is constantly changing. At the same time, it is always stagnant. Groningen, 10:14, Saturday, 5/25/2019

#### 4433. 早朝に鳴く小鳥の鳴き声のように

昨日に引き続き、今朝も午前3時に起床した。いつものように、オイルプリングの実践およびヨガの実践をしてから一日の活動を始めた。

---

すでに目覚めの一杯としての大麦若葉を飲み、4時を迎えようとしている今においては、ベジブロス  
の出汁をもとにしたスパイス入りの味噌汁を飲んでいる最中である。この時間帯は、フローニンゲン  
も闇に包まれており、小鳥たちの鳴き声はほとんど聞こえてこない。かろうじて、私と同じぐらいに早  
起きをした小鳥が一羽ぐらいいるかどうかといったところである。

その一羽の鳴き声に耳を傾けてみる。確かに一羽しか鳴いていないのであるから声量は小さいが、  
その一羽の声にも貴重なメッセージ性が含まれているように感じるのである。

一羽の声にも意味がある。そんなことを思っていると、自分という一人の人間がこのようにして何か  
声を発していることにも意味があるのかもしれないと思えてくる。

一羽の小鳥の声に呼応してか、別の小鳥が今鳴き始めた。鳴き声に意識を向けてみると、どうやら  
二羽は種類が異なるらしい。まるで、異なる二つの弦楽器による演奏が鳴り響いているかのようであ  
る。

たった一羽の声が別の小鳥に届き、その小鳥が鳴き声を上げ始める。声というのは影響力があり、  
何か行動を促す力があるらしい。そうであれば、自分も精一杯の声を発してみようかと思う。

誰かに向けて鳴き声を上げているわけでもなく、たった一羽でも鳴き続けるあの小鳥のように、自分  
も声を発し続けていこうという気持ちになる。目的もなく、たった一人で発し続ける声があってもいい  
はずである。そうでなくてもこの世界は、目的という名に害され、私利私欲を満たすための声で溢れ  
ているのだから。

昨夜、無事に監訳書の三校のレビューを終えた。レビューそのものは数日前に終わっており、レ  
ビュー結果を編集者の方に送っていたのだが、私が執筆を担当している「はじめに」および「監訳  
者の解説」の部分に対する追加修正が最後の最後に残っていた。一度大きく修正をし、それを編  
集者の方に送った後に再度フィードバックを得ていた。付されたコメントを読みながら、再度一言一  
句確認をしていくということを昨日行っていた。

編集者の方からの的確なコメントおよび編集のおかげで、とても納得のいく文章になったように思う。  
読者の目線に立って文章を書こうとしていながらも、ついついそこから乖離してしまいがちな自分が

---

いることを今回の執筆で気づかされた。そうした自分のあり方を絶えず軌道修正してもらいながら、昨夜なんとか最終稿として原稿を提出した。書籍の出版日は、今のところ6/15(土)とのことである。

ちょうど3週間後の土曜日出版となる。成人発達理論が徐々に普及を始める日本社会の中で、成人発達理論を核にしたインテグラル理論というものがいかに受け入れられていくのかは楽しみであり、今後も自分にできる範囲のことを継続していきたいと思う。フローニンゲン:2019/5/25(土)

04:20

#### No.1983: A Short Breath of a Cloudy Rose

The sky became cloudy, and so a rose did. Then the rose took a short breath. Groningen, 14:18, Saturday, 5/25/2019

#### 4434. この夏の旅について

ジョージアへの旅行とロシアへの旅行がチラチラと脳裏をかすめるので、先ほど少しばかり航空券の様子を窺っていた。アムステルダム空港からジョージアの首都トビリシの空港に向かう直行便というのはやはりほとんどなく、移動が大変不便だという印象を改めて受けた。

日によっては直行便があるのだが、ほとんどの日は乗り換えが必要である。乗り換えの時間がスムーズであれば問題ないのだが、空港での待ち時間が多い上に、トビリシに到着するのが深夜であったり、明け方のとんでもなく早い時間帯であったりすることは厄介だ。かろうじて6月の半ばあたりに直行便を見つけ、アムステルダムからトビリシに向かう便の時刻などは適正であったが、帰りの便の出発時間がいかんせん早く、トビリシへの旅行に二の足を踏んでしまう自分がいる。

一方で、アムステルダムからモスクワに向かうフライトは非常に充実している。価格的にも本数的にも選択肢が多く、アムステルダムからの出発時刻とモスクワへの到着時刻の双方において、自分の生活リズムに合致するものが幾つかある。こうした点において、ジョージアへの旅は少し先延ばしにして、最初にモスクワに足を運んでもいいのではないかと思い始めている。

---

当初の予定では、モスクワへの旅は7月か8月を予定していた。過去2年間において、8月は常に北欧に旅をし、涼しい場所で過ごすことが続いており、それを考えると、今年もアイスランドかどこかで夏のひと時を過ごそうかと考え始めている。アイスランドへの旅も前々から考えていたが、それはオーロラを見るためだった。夏の場合だとオーロラは観測できなさそうだが、アイスランドの自然の中でゆっくりと過ごすのも悪くないと思い始めている。

8月にアイスランドに行くのであれば、7月か、あるいは6月の末あたりにモスクワに行ってみるのがいいかもしれない。モスクワは寒い印象があったのだが、この時期の気温を調べてみると、極めて暑いことに驚かされた。特に来週は、30度近い日が続いており、私がモスクワに対して抱いている印象を随分と覆す気温になっている。ひよつとすると、今週と来週が異常なだけかもしれないと思って調べてみると、5月のモスクワの最高気温の平均は19度、最低気温の平均は8度とのことであり、やはり来週が少しばかり異常なだけなのかもしれない。

いずれにせよ、アムステルダムからモスクワへのフライトはわずか3時間ほどであり、それはバルセロナに向かうのとほとんど変わらず、さらにはフライトの時間や本数も全く問題ないので、トビリシに行くよりも先に、まずはモスクワへ旅をしたいと思う。今のところ、6月末か7月の初旬にモスクワに行き、8月のどこかでレイキャビクに旅をしようかと考えている。フローニンゲン:2019/5/25(土)04:36

#### No.1984: In Front of the Door of the Demi-Reality

The door of the demi-reality is always open in front of us. Groningen, 16:43, Saturday, 5/25/2019

#### 4435. 便に愛しさを感じる夢

時刻は午前5時に近づいている。闇の世界から少しずつ表情が変わり、現在は空がダークブルーに変わりつつある。

今日も穏やかな一日が始まろうとしている。休日を迎えた今日は、平日以上に平穏な雰囲気呈するだろう。幸いにも今日も晴れとのことであるから、午後にでも近所の河川敷に散歩に出かけようと思う。今日はこれから早朝の作曲実践を行い、この二日間に引き続き、ザカリー・スタインの新刊

---

書“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”の続きを読んでいこうと思う。一目置いている哲学者のスタインであるからから、彼の書籍を一文一文丁寧に読み進めている自分がいる。今日は可能であれば第2章と第3章を読み、明日は第4章と第5章を読めればと思う。

これから早朝の作曲実践に入る前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。今朝方の夢の記憶は断片的であるが、内容としては非常に興味深い。端的には、今朝方の夢は便に関するものだった。夢の中で私は、糞便を基にした健康に関するコンサルティングを専門としており、便に関する高度な知識を身につけていた。

どのような便が心身のいかなる病気に対応しているかを把握しているだけではなく、便の種類ごとの改善策についても実践的な知を有しているようだった。そうした知識を獲得できた背景には、便に関する学術的な探究と、自らを対象にした様々な実験、さらにはこれまでに積み重ねてきた便に関するコンサルティング業務という実務経験の蓄積があるようだった。

夢の中の私は、このコンサルティング業務に大きな意義を見出していた。特に、既存の医学ではなかなか手の届かない病気についても、便からアプローチをし、腸内環境を整えていくことによってそうした病気を治癒できることに意義を見出しているようだった。こうしたコンサルティング業務を続けていたある日、一人の若い男性の医師が私の元にやってきて、便について色々と教えて欲しいとお願いをしてきた。私はその申し出を快諾し、後日、その方が働く病院に足を運び、彼の部屋で話をするようになった。

お互いの年齢が近いいためか、私たちは意気投合し、便について語り、便について意見交換をしているとあっという間に時間が経った。おそらく、数時間は便について語り合っていたのではないかとと思う。便に関する対話がひと段落すると、ちょうどその方の患者がやってきて、今話をしたことを基に、その患者の便の様子を見ようということになった。その患者は若い女性であり、外見上は非常に健康そうである。

だがどうやら彼女は、精神的な病気を抱えているようだった。私たちはその患者にお願いをし、便を採取してきてもらうことにした。しばらくして私たちは彼女の便を受け取り、とりあえず彼女には今日



---

はもう帰宅してもらおうことにした。その医師の部屋で私たちは、これからその便を顕微鏡で眺めたり、化学反応を調べてみたりすることにした。

私:「先生、どうですか、便は愛らしいでしょう? 笑」

医師:「本当にそうですね! 便ってこんなに可愛らしいものだったんですね笑」

私:「私たちは皆、違う顔を持っているでしょう? 便も同じで、彼らにも個性があるんです」

そのようなやり取りをしながら、私たちは好奇心と楽しさという感情に満たされた中で、一つの便と向き合っていた。

今朝方はそのような内容の夢を見ていた。食生活の改善及び腸内環境(さらには口内環境)の改善に関心を持ち始めてから、便を毎日観察するようになっており、そうしたことが今朝方の夢の出現に一役買っているのかもしれないと思った。

夢から目覚めた瞬間に、「今朝は面白い夢を見た」と自分でも思ってしまうぐらいに、それは大変興味深い内容の夢だった。医者と協働して便に関するコンサルティングを行うというのも何か面白そうであり、夢の中の私が感じていたように、それには意義があるように思える。フローニンゲン:2019/5/25(土)05:15

No.1985: A Beautiful Butterfly in the Dark Soul Society

Today was a day that I could find a beautiful butterfly in the dark soul society, which gave me a feeling of ominous but profound happiness. Groningen, 20:49, Saturday, 5/25/2019

#### 4436. 評価測定の危機: アセスメントとそこで信奉されている物語

早朝3時に起床してから、早いもので6時間が経過した。この間に日記を執筆し、早朝の作曲実践をし、読書を行っていた。特に読書に関しては、ザカリー・スタインの最新刊“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”の続きを読み

---

進めていた。ようやく先ほど第3章に入った。各章実に示唆に富んでおり、人間及び社会の発達、さらには現代の種々の社会的病理について考察を迫られる内容に溢れている。

先日、日本で卒業した大学の入試問題を久しぶりに眺めてみたことについて日記に書き留めていたように思う。その際に、大学入試を実際に受けた時には気がつかなかった視点として、その大学が人材要件及び人材育成の方針に関していかような物語を保持しているのか、というものであることに気づいた。

スタインが指摘するように、私たちの社会が何を測定評価しようとするのかは、その社会が共有している物語を如実に映し出している。それを基にすれば、「社会」の範囲を縮小・拡大してみると、その社会において何が信奉されているのかがわかることに気づく。まさに、ある「大学」という一つの社会が何に価値を置いているのか、そしてその価値を生み出している物語とは一体何なのかを見極めるには、その大学が採用している評価測定内容を精査してみることが重要になる。

これは言うまでもなく、大学入試に限らず、企業の入社試験や昇進に関わる評価制度などにも当てはまる。さらには、国家規模で実施されている教育アセスメントの内容や、グローバル経済において採用されているアセスメントないしは評価尺度の内容を精査してみれば、それぞれの世界において何が価値として信奉されており、それがいかような物語を元に生み出されているのかに気づくことができるだろう。

そしてスタインが指摘するように、この現代社会に存在する大小様々な「社会(ないしは世界、あるいは領域)」においては、評価測定の内容や仕組みが危機に瀕しており、それがその社会の存続及び発達に大きな危害を加えているのである。

評価測定の内容や仕組みがいかような危機に瀕しているの具体的な話は本書に譲るが、そうした危機を生み出しているのは、大小様々な特定の社会において、各社会が自らが信奉している価値が特定の物語に立脚していることに盲目的であること、及び各社会が入れ子構造になっているという性質上、複数の社会が結託ないしは癒着することによって、画一的かつ歪んだ価値とそれを生み出す大きな物語が広くかつ根深く共有されてしまっていることにあるように思える。

---

今日はもう少し晴れると思っていたが、この時間帯のフローニンゲンの空は雲に覆われている。光が差し込んでこない様子は、どこかこの現代社会の様子を映しているかのようだ。フローニンゲン：  
2019/5/25(土)09:15

No.1986: Tranquil Waves

A new day began. I have tranquil waves within me that come and go. Groningen, 07:42, Sunday,  
5/26/2019

4437. 静かな夕方に

時刻は午後7時半を迎えた。休日最初の日が、今ゆっくりと終わりに向かっている。

今日は早朝から午後までは曇っていた。このリアリティは絶えず変化していながらも、同時に、このリアリティは絶えず淀んでいることを静かに語りかけてくるような曇り空であった。そこから夕方になると晴れ間が見え始めた。私はそれに合わせて支度をし、近所の運河敷にジョギングをしに出かけた。

今日は思っていた以上に肌寒く、いつもの折り返し地点に到着しても汗を一向にかかなかった。途中で運河から愉快的な笑い声が聞こえてきた。振り返ると、ボートに乗った何人かの成人男性たちが酒を片手に夕方のひと時を楽しんでいるようだった。そんな様子を眺めながら、私は足元の地面を見たり、道端の草花を見ながら一人その場を後にした。

自宅に向かう一步一步の歩みに合わせて、このリアリティについて考えていた。この現代社会の有り様について考えていた。この現代社会が明るみにする光と闇。そしてこの現代社会の背後にある光と闇。それらについて考えているとめまいがしそうになる。

運河に反射する午後の太陽の光を眺めた時、もう少し走れるような気がした。

夕方の出来事を回想していると、少しばかり黙想的な気持ちになる。早朝と同様に、今も小鳥たちが鳴き声を上げていることに気づく。

午前中の曇り空が嘘のように、午後8時を迎えようとする今は西日がまだ燦然と輝いている。

---

今日は夕方のジョギングから帰ってきてから、クロレラを二杯ほど飲んだ。クロレラを摂取していると、自らの生命の奥から力が湧いてくるような実感がする。

今から何十億年も前からこの地球上で生きていた生命を、今この瞬間の自分が摂取していることに畏怖の念を持つ。様々な生命の命という恩恵の下に今の私は生きているのだ。それを改めて実感する。

今朝の起床は午前3時であったから、20時を迎えようとしている今となってはそれは17時間ほど前のことになる。今朝方の夢がどのようなものであり、それをどのように振り返っていたのか忘れてしまったので改めて日記を読み返してみると、今朝は便に関する夢を見ていたようだった。

そうだ、私は夢の中で、便に関するコンサルタントだったのだ。そうした夢が作用したのか不明だが、今朝の最初の排便はいつもよりずっと早く、5時半あたりだったと思う。そこから時間をおいて、午前中に合計で3回ほど排便があった。食べる量は全く多くなく、いつも腹6分ほどしか夕食を食べていないのだが、やはり便の多くは水分であり、腸内細菌の死骸や腸壁の剥がれ落ちたもので便のほとんどが構成されていることを改めて知る。

便の観察を続ければ続けるほど、「便」というのは、腸からの「便り」だということに気づかされる。そうした便りを受け取り、便に対して便りを返すように、腸内環境をできるだけ整えていくということを継続して行っていきたい。今日も一日が終わり、また新しい一日が明日にやってくる。フローニンゲン：  
2019/5/25(土) 19:58

#### 4438. 日曜日の早朝に

時刻は午前5時を迎えた。昨日は午前3時に起床したが、今朝は4時半を迎える前の起床だった。その頃にはもう小鳥たちが鳴き声を上げ始めていた。

昨日の土曜日が終わり、今日からは日曜日を迎えた。日曜日の朝はとても穏やかであり、まだ日は昇っていないが、徐々に辺りが明るくなってきている。

---

昨日、一つ興味深いメタファーが自分の内側に浮かんでいた。それは、現代の社会の様々な領域に存在する構造的なバグを発見し、それを修正・改善していくプログラマーのような存在を示唆するものであった。

現代社会が変容を遂げていくには、そうした存在が各領域、さらには領域横断的に、もっと言ってしまえばメタ領域的に必要なのだと思う。バグを発見するためには、そもそもバグとそうではない健全・正常なものとを識別するための観点が必要であろう。しかもその観点には、広さと深さが求められる。さらにはバグを発見し、それを修正・改善していく段階においては、技術が求められる。そこにおいても学習と実践の積み重ねによって十分に鍛錬された実務的スキルというものが要求されるのは言うまでもない。そのようなことを昨日はぼんやりと考えていた。

監訳書の出版まであと3週間ほどであるが、一昨日にそれがようやく落ち着いた。三校のレビューと修正を無事に編集者の方に提出し、残すところは念校を確認する程度である。

今年度の仕事にはどのようなものがあるかをざっと確認してみると、来月から動き出す大きな協働プロジェクトが2件、そしてこの夏から動き出す大きな協働プロジェクトが1件ほどあり、その他にも協働研究プロジェクトが1件、比較的小さな協働プロジェクトが1件ほどあることに気づく。それに加えて、昨年から話があった協働プロジェクトが1件新しく始まるかもしれない。今は動き出しているプロジェクトに集中し、一つ一つのプロジェクトを着実に進めていこうと思う。

よく私は、教育哲学者のジョン・デューイが提唱したプロジェクト学習を行っているように思えることがあるが、プロジェクトを通じて学ぶ事柄は本当に多いということを教えられる。教育哲学者のザカリー・スタインが“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”の中で主張しているように、私たちは、この現代社会の個別具体的な課題と向き合い、その解決に向けて力を発揮していく際に深い学びが得られる。これはまさに、スタインが師事をしていた発達科学者のカート・フィッシャーが実証的に明らかにした事柄でもある。いずれにせよ、今後もこの現代社会の課題と向き合い、その解決に向けて尽力をしていくというスタンスを持ち続けたい。絶え間ない社会関与と絶え間ない学習及び発達というのは密接に関係しているのだから。フローニンゲン:2019/5/26(日)05:18

I'll take a walk after I read the rest of "Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)" by Zachary Stein. Groningen, 13:19, Sunday, 5/26/2019

#### 4439. 今朝方の夢

今、昨夜作ったベジブロスに有機八丁味噌と各種スパイスを入れた味噌汁を飲んでいる。先日、街の中心部のオーガニックスーパーで話しかけた男性が述べていたように、この八丁味噌は実に美味しい。彼はマイルドな味だと表現したが、私はかなり濃厚な味噌だと思う。

日本の伝統的な発酵食品である味噌を朝に摂取することから一日を始められることが、これほどまでに自分にとって嬉しいものであり、なおかつ活力を自分にもたらしてくれるものであるとは思ってもみなかったことである。一杯の味噌汁から一日を始め、また一杯の味噌汁で一日を終わる。そのような日々がこれから続いていくだろう。

本日の活動に本格的に入る前に、今朝方の夢について振り返りをしておきたい。

夢の中で私は、見覚えのない場所のホームセンターにいた。そこでは日曜大工の様々な製品が売られており、ここに来れば揃わないものはないというぐらいに品が充実している。私はそこで買い物を終えたようであり、ホームセンターとその外にある駐車場の間に立っていた。一般的な店で見られるように、店と駐車場の間にはベンチがあったり、自動販売機があったりするかと思う。そうした場所に私は立っていたのである。

見るとそこには自動販売機らしきものがあり、さらにはスピード写真の機械も置かれていた。それを見たとき、ここは日本なのではないかと一瞬思ったが、その場の雰囲気から察すると、そこはオランダとベルギーの国境付近のように思えた。

私はその場に立ち止まり、四方をゆっくりと眺めていた。するとそこに、著名な発達科学者のポール・ヴァン・ギアート教授が現れた。ヴァン・ギアート教授は、発達科学者のカート・フィッシャー教授と親交が厚く、二人は長年にわたって良き協働研究者であった。二人は共に現役から退いているが、ヴァ

---

ン・ギアート教授に関しては、まだ学会でゲストスピーカーとして講演をすることなどがある。また何より、ヴァン・ギアート教授は、私がフローニンゲン大学で所属していた学科のトップを長く勤めていたこともあり、とても親近感のある存在である。ヴァン・ギアート教授と偶然その場で出会い、私たちは少しばかり話をした。

ヴァン・ギアート教授はベルギー人であり、オランダ語、フランス語、英語を流暢に話すことができる。以前アムステルダムでの学会でお会いした時には、英語で話をしていただが、夢の中ではなぜか日本語で話をしていただ。

どのような話の流れでそうなったのかは不明だが、私はヴァン・ギアート教授にお金を渡した。どうやらヴァン・ギアート教授に代わりに買い物をしてもらっており、目的の品の代金をその場で支払っているようだった。私はすぐに計算ができずに、面倒臭いので少し多めに9ユーロを渡した。すると、ヴァン・ギアート教授はお釣りとしてコインを1枚手渡してくれた。

そのコインを見ると、「10DY」という数字が彫られていた。「DYというのは一体どこの通貨なのだろうか？」と私は疑問に思ったが、どうやら今自分がいるオランダとベルギーの国境近辺の場所ではその通貨が使えるらしく、オランダでもベルギーでもそれを使うことができるのだと察した。それについてヴァン・ギアート教授に確認すればよかったが、私はそれをしなかった。

実は、ヴァン・ギアート教授からお釣りを受け取った時、私はその金額が少し少ないのではないかと思った。いやそもそも、「10DY」というのがどれほどの価値を持つのかが全くわからなかった。とはいえ、購入した品の金額、さらには、ヴァン・ギアート教授に手渡した9ユーロというのも大した金額ではなかったため、私はそれ以上お釣りを気にすることはなく、ヴァン・ギアート教授に別れの挨拶をしてその場を立ち去った。フローニンゲン:2019/5/26(日)05:52

#### No.1988: Scintillation in the End of a Day

It began to rain. Today is also approaching the end. The essence of tomorrow will be the same as that of today, which is scintillation. Groningen, 20:21, Sunday, 5/26/2019

時刻は午前6時を迎えた。今日もこの時間帯は、空にうっすらとした雲が見える。どうやら今日は、一日を通して曇りらしいが、午後には近所のスーパーに買い物がてら散歩に出かけたいと思う。

今日もまたいつもと同じように、作曲実践を中心とし、それに並行する形で読書を行っていく。ここ数日間、ザカリー・スタインの最新刊“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”を食い入るように読み進めている。

本書から得られること、考えさせられることは多岐にわたっており、一読するだけでは勿体無い稀有な書籍である。昨日は計画以上に本書を読み進めており、今日は第4章の残り第5章を読み進めていこうと思う。すでに第6章は読んでいるため、本日中に初読が完了するだろう。普段は初読から再読に少し時間を空けることが多いが、今回はそのようなことはせず、明日から再び本書を読み返していく予定だ。スタインの思考過程を何度も辿りながら、現代社会を包括的に捉える眼を涵養していき、自らの実践にそれを役立てていく。

以前に、作曲上における制約について話をしていたように思う。制約には様々なものがあり、それは音楽理論という文法に内包されたもの、作曲上の自分の癖、ないしは感性そのものが制約になる。そうした制約から完全に逃れることはできないし、それをする必要でもない。重要なことは、いかなる制約を自分が抱えているのかを認識することである。また何よりも、現在の制約が将来の自由につながるかという観点を持って制約と向き合うことも大切だろう。この点に関しては、スタインの書籍からヒントを得たように思う。

仮に現在自由気ままに曲を作り、それが将来のより大きな自由につながらないのであれば、現在の自由勝手な作曲実践にはほとんど意味がない。構造的には、随分と前にフリースクール運動が米国で広がり、そこでは子供たちに自由が与えられたのだが、それが失敗に終わった事例と似ている。フリースクール運動の失敗の根幹には、制約というものに対する考察の欠如があり、将来のより大きな自由につながらない現在の狭い自由を子供たちに与えてしまったことが要因としてあった。例えば、子供たちが読み書きや計算をすることを嫌った場合に、彼らに野放しの自由を与えて、そうした能力を身につける機会を一切与えなくていいのだろうか。



---

教育哲学者のデューイは、このの問題を見事に見抜いていた。「子供たちの興味関心の赴くままに自由に学ばせる」というのは聞こえがいいのだが、そもそも世界を見通す観点の幅と深さが未熟な子供たちに短期的な自由を与えてしまうことが、結局彼らの長期的な自由を奪いかねないことには注意が必要である。

上述の例に戻ると、例えば読み書きや計算ができるというのは、この現代社会において健全な市民生活を送る上では不可欠な事柄であり、それらの能力が未成熟であることは、職業を通じた社会参画の機会や、それと合わせて生活の糧を得る手段を喪失してしまうことにもなりかねないのである。まさに、短期的な自由ではなく、さらに大きな将来の自由を子供たちが獲得できるように寄り添い、彼らを正しく導く存在というのが、健全な、あるいは真の教育的権威 (teachery authority) の体現者だと言えるのではないかと思う。

そのようなことを考えながら、自分の作曲実践について考え直していた。私は、物理的な肉体を持つつかなる師にもついていない。そうしたことから、作曲に関して自分を導いてくれる真の教育的権威はいないと言えるため、自らがその役割を果たしていく必要がある。それを行うのは簡単ではないが、現在自分が自由に曲を作ろうとしている意図が働けば、そこにあえて待ったをかけ、将来のより大きな自由、すなわち自由自在に自分の内的感覚を曲として表現することに対して、今その瞬間の自由なるものが本当にそこに結びつくのかを考えたい。

そして、あえて様々な制約条件を自らに課していき、そうした制約を鍛錬を通じて一つ一つ乗り越えていく過程を通して、広大無辺な自由な作曲の境地に向かっていきたいと思う。フローニンゲン：  
2019/5/26(日)06:21

#### No.1989: Full of Energy

I can feel that I'm filled with energy. The sky starts to become clear. Groningen, 08:39, Monday,  
5/27/2019